

はじめに——地域課題×大学生＝出会いが可能性をひらく

本報告書は、鹿児島県鹿屋市において、大阪大学の学生と教職員が2021年度に実施した3回の鹿屋フィールドワーク、中でも3回目のPBL活動(2021年11月13日～15日)とその報告会(2022年1月19日)をまとめたものです。PBLとは、「PBL (Project-based Learning (問題解決型学習))」のことで、地域の課題解決を行う現場で学生たちが実社会の課題に学ぶ教育活動をいいます。

本事業は、文部科学省「実社会課題に対応するコミュニケーションの推進事業」(2019年～2023年度)として、大阪大学社会ソリューションイニシアティブ(SSI)が「社会ソリューションコミュニケーター育成事業」の一環として実施しました。SSIでは、「命を大切に、一人一人が輝く社会」を目指し、命を「まもる」、「はぐくむ」、「つなぐ」という視点から、社会の現場の人々と協働して諸課題に取り組む「社会ソリューションコミュニケーター」の育成に取り組んでいます。

地域課題といっても、一つの課題が単体して存在するのではなく、複数の課題が絡まり合い、その分、それらに応じてさまざまな立場の方々がいて、さまざまな見方があります。鹿屋市の菅原地域・天神町でPBLを実施しましたが、話を聞かせていただき、まち案内をしていただいただけでも、防災、少子高齢化、耕作放棄地や鳥獣被害、地域活性化や日常生活の困りごとなど、さまざまな課題の現れ方を知りました。それにかかわっているのは、行政、企業、住民だけでなく、複数の部署、複数の町内会、多様なアクターなどであり、この地域に観光にやってくる人たち、そして私たちのような大学、「よそ者」もいるでしょう。こうした実社会の課題を、現場で、その課題に取り組んでいる方々の思いと活動を通じて学べる機会は、そうありません。

今回、鹿屋市でのPBLを通じて学生たちがしきりに口にするのは、報告会の様子からもわかるように、「お世話になった」「かわいがってもらった」「(住民の)防災意識が高い」「(自然の魅力と)人の魅力が素晴らしい」「(人が)温かい」ということです。PBLの先生は、「地域のみなさん」だということをあらためて感じました。学生にとっては大きな学びとなりましたが、「地域のみなさん」にとってはどうであったか。この点は、今後も継続的なかわりの中で確認し合いながら、「距離」を縮めていけたらと思います。また、地域の課題解決はそう簡単ではないなかで、学生・教職員も一緒に「地域のみなさん」と知恵を出し合っていくことができたらと思います。

2019年からSSI基幹プロジェクト(代表 稲場圭信大阪大学大学院教授)を通じて鹿屋とのご縁が生まれ、PBLを実施させていただいたのが2021年、3年目にこのような機会を提供くださった鹿屋市役所の皆さま、PBLのフィールドである天神町内会の皆さま、その他、ご協力くださった皆さまに、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

今井貴代子

大阪大学社会ソリューションイニシアティブ特任助教

目次

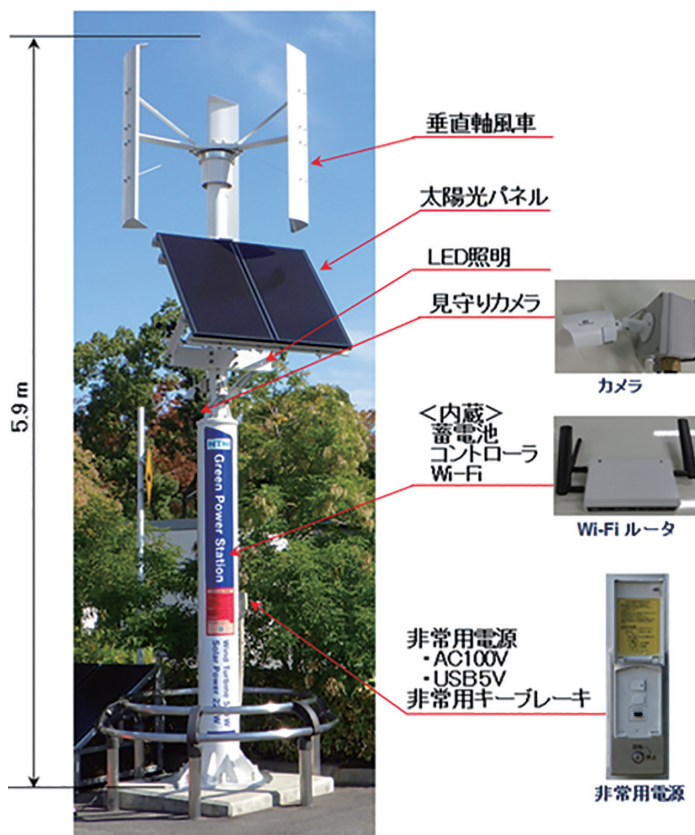
1. はじめに——地域課題×大学生＝出会いが可能性をひらく	2
2. これまでの経緯——鹿屋市と大阪大学との出会い	3
3. 鹿屋フィールドワーク2021の概要	5
4. 鹿屋フィールドワーク2021報告会	10
5. 参加した教職員の感想	33

これまでの経緯——鹿屋市と大阪大学との出会い

関係人口という言葉が、昨今、様々な場で使われています。関係人口とは、もとは「よそ者」の人々。その「よそ者」が、土地の人たちと関わりを重ねる中に、自分が関わっているその地域への愛が生まれる。関係人口となる大阪大学の私たちの鹿屋市への愛は、どのようにして始まったのでしょうか。

2019年10月、SSIの井上大嗣研究員と伊藤武志教授が鹿屋市を訪問、市の抱える課題を伺いました。2020年2月6日、鹿屋市政策推進課の課長補佐(当時)の鳥越賢二さんと主事(当時)の徳永光亮さんが大阪大学にお越しになり、私もお会いしました。意気投合し、2週間後の2月19日、私は伊藤教授と鹿屋市役所を訪問、中西茂市長と面談し、まずは防災・減災の取り組みで動き出すことになりました。その後、防災・減災の取り組みに加えて、PBLを鹿屋市で実施する方向で検討が進み、SSIの今井貴代子助教が担当となり、人間科学研究科の川端亮教授(元研究科長)も担当教員として参画することになりました。

大阪大学人間科学研究科で私たちが2017年度に始めた「ITを用いた防災・見守り・観光に関する共同研究」は、2018年度からはSSI基幹プロジェクト「地域資源とITによる減災・見守りシステムの構築」として取り組みを進め、2019年には共同研究・プロジェクトから社会実装のために「一般社団法人 地域情報共創センター」を設立しました。減災のための社会実装の取り組みは主に2つ、独立電源通信システム「たすかんねん」と避難所情報共有システム「災救マップ」です。



独立電源通信システム「たすかんねん」



鹿屋市「災救マップ」

<https://kanoya.respect-relief.net/>

2020年11月、再度鹿屋市を訪問、「たすかんねん」と「災救マップ」の導入の協議と、鹿屋市でのPBLの相談をしました。協議を重ね「災救マップ」の導入が決まり、「災救マップ」を鹿屋市用にカスタマイズして、2021年7月1日、鹿屋市「災救マップ(避難所マップ)」の運用が開始しました(<https://www.city.kanoya.lg.jp/azen/saikyumap.html>)。同時に、鹿屋市総合スマートフォンアプリ「かのやライフ」の避難所マップとして、「災救マップ」が組み込まれました。PBLの取り組みは、その7月と、10月、11月と3回実施され、2回目の10月には「災救マップ」も活用した鹿屋市災害対策本部訓練が実施されました。

避難所を開設運営し、時々刻々と変わる避難所の状況を役所の対策本部および市民に通知する、これらをすべて市職員だけで対応するのは非現実的な机上の空論です。大災害時には市職員も被災したり、道路が寸断されたりして避難所まで行くことができないという事態を想定しての備え、連携の仕組みが必要です。地域防災の取り組みは、地域住民が主体で、地域住民のためのもので、行政の仕事の効率化、合理化のためではありません。どうしたら地域住民の防災意識が高まり、地域住民が実際に災害への備えをし、いざという時に避難行動をとるのでしょうか。この課題がPBLの取り組みのひとつです。

鹿屋市からの要望と期待もありました。

- ・PBL学習を通じて学生の柔軟な発想によるアイデアや学生の行動力により新たな防災の取り組みができるのではないか
- ・危険地域に住んでいながら逃げなかった人(避難訓練に参加しなかった方々)に理由や問題点を聞き取ってもらうような取り組みはできないか

日常のつながりをもとに災害時の「共助」につなげていくことも大切です。まちづくり、地域活性化、高齢者や子どもの見守り・ケアの文脈とも接続します。関係人口には、自分自身が関わっている地域をより良くしていこうとする当事者意識があります。それは、その土地の人にも、よそ者にも双方によい影響を与えることでしょう。今後の取り組みが楽しみです。今後とも、よろしくお願いいたします。

稲場圭信

大阪大学大学院教授(人間科学研究科・共生学)
SSI基幹プロジェクト「地域資源とITによる減災・見守りシステムの構築」代表
一般社団法人地域情報共創センター(RICCC)顧問

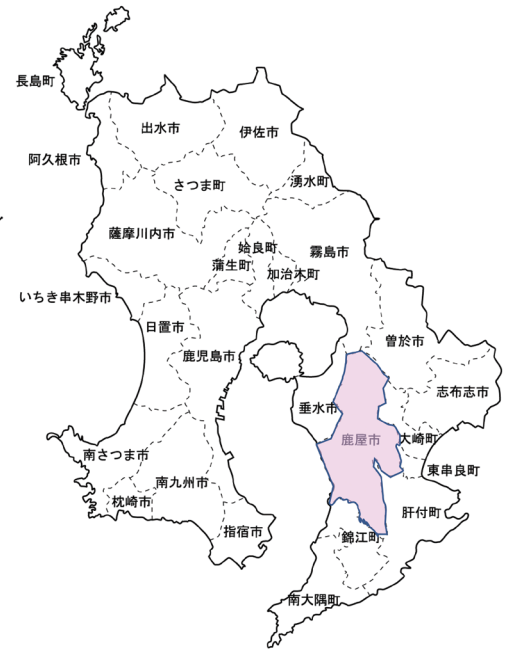
鹿屋フィールドワーク2021の概要

●鹿屋市の地域概要

鹿屋市は、鹿児島県大隅半島のほぼ中心部に位置し、行政・経済産業の中核を担う都市です。県内では、鹿児島市、霧島市に次いで3番目に多く、人口は約10万人です(2022年1月現在)。市の北部には壮大な高隈山系が連なり、西部は鹿児島湾(錦江湾)に面した美しい海岸線が見られ、南部は吾平山上陵を有する山林地帯があります。年間を通じて温暖な気候で、農業や畜産が盛んです。日本最大級のかのやばら園、日本で唯一の国立大学鹿児島体育大学、海上自衛隊鹿屋航空基地などの施設も集積し、スポーツや健康を活かしたまちづくりが取り組まれています。

鹿屋市を取り巻く環境としては、①人口減少と少子高齢化、10歳代の進学・就職による転出超過、②グローバル化による外国人との共生、③豪雨や地震など自然災害の危機、④高度情報化、価値観・ライフスタイルの多様化、などが挙げられています(『第2次鹿屋市総合計画』より)。

鹿屋市ホームページ <https://www.city.kanoya.lg.jp/index.html>

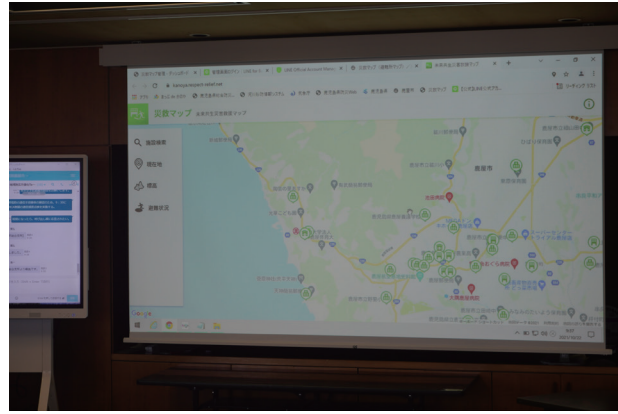


鹿児島県及び鹿屋市の地図

●2021年度 鹿屋訪問のスケジュール

2021年度、鹿屋市に3回訪問しました。訪問スケジュール、参加者は以下の通りです。

1回目 7月2日～4日	2回目 10月20日～22日	3回目 11月13日～15日
鹿屋市役所で災救マップ・PBLの打ち合わせ 川東町内会長から町内会(自主防災組織)避難訓練のお話 指定避難所めぐり 等	鹿児島県防災研修センター訪問 鹿屋市役所にて、災害対策本部訓練見学 小鹿酒造株式会社、久保醸造合名会社等 見学 等	PBL活動(鹿屋市菅原地域・天神町をフィールドに、防災や地域活性化などの地域課題について学ぶ活動を実施)※後述
稲場圭信・川端亮(大阪大学人間科学研究科) 川瀬純菜・中野立開・梅歩実(大阪大学人間科学部学生) 伊藤武志・小出直史・畑中英理子・今井貴代子(大阪大学社会ソリューションイニシアティブ) 合計9名	稲場圭信・川端亮(大阪大学人間科学研究科) 小島誠一郎・峯英一郎(一般社団法人地域情報共創センター) 乾亜里沙・梅歩実・李傑豪(大阪大学人間科学研究科・人間科学部学生) 井上大嗣・今井貴代子(大阪大学社会ソリューションイニシアティブ) 合計9名	稲場圭信・川端亮(大阪大学人間科学研究科) 趙夢盈・陳重道・川瀬純菜 中野立開・梅歩実(大阪大学人間科学研究科・人間科学部学生) 井上大嗣・畑中英理子・今井貴代子(大阪大学社会ソリューションイニシアティブ) 合計10名



※災害対策本部訓練の様子（2回目訪問時・10月22日）。種子島東方海域を震源とする地震発生を想定した庁内の災害対策本部の訓練。LoGo チャット、災救マップ、統合型 GIS、MCA 無線等、さまざまな情報交換ツールが用いられ、シナリオに基づき市内の被害及び避難所の情報が収集され、対応が図られていました。

● PBL（11月13日～15日）活動内容

11月の訪問は学生向け PBL として実施しました。鹿屋市の中でも、西部の海岸地区に位置した菅原地域の天神町を中心としてフィールドワークを行いました。この地域は錦江湾に面し、津波や土災災害の危険性があるため、住民の防災意識が高く、また、荒平天神や廃校を活用した体験型宿泊施設「ユクサおおすすめ海の学校」などの観光スポットがあり、地域住民によるさまざまな地域活性化の取り組みがなされています。

鹿屋市役所安全安心課 臼口哲郎さん・大原龍太さん・横山太さん、地域活力推進課 鳥越賢二さん・橋口理恵さん、また天神町内会長の上園勝己さんはじめ住民の皆様にご協力いただき、防災と地域活性化をテーマにした PBL を企画・実施することができました。

参加学生は、趙夢盈（人間科学研究科博士後期課程 2 回生）、陳重道（人間科学研究科博士後期課程 1 年生）、川瀬純菜（人間科学部 4 回生）、中野立開（人間科学部 4 回生）、梅歩実（人間科学部 3 回生）です。

以下、スケジュールと活動内容を簡単に紹介します。

11月13日(土)	大阪発一鹿児島・鹿屋着
11月14日(日)	
午前	●天神町内会 避難訓練 参加 ●町内見学・住民の方へのインタビュー 【案内：天神町内会長 上園勝己さん】
午後	●ユクサおおすすめ海の学校について 【お話：マネージャー 繁昌孝充さん】
夕方	●天神町内会の方々との懇親会@天神町構造改善センター
11月15日(月)	
早朝	●カンパチ水揚げ・えさやり体験@古江港 【案内：漁師 柿内隆幸さん】
午前	●鹿屋市 中西茂市長への表敬訪問 ●菅原地域のまちづくりについて@ユクサおおすすめ海の学校→まちあるき 【お話：地域活力推進課 橋口理恵さん】 【案内：上園勝己さん】 ●地域おこし協力隊について@鹿屋市役所
午後	【お話：農林商工部 ふるさと PR 課 政岡亜果さん 農林商工部 商工振興課 押領司拓海さん】
夕方	鹿児島発一大阪着

●天神町内会 避難訓練への参加・住民の方へのインタビュー

土砂災害の危険性の高い天神地区では、毎年土砂災害時の避難訓練が行われています。例年は地震を想定した訓練でしたが、2020年7月豪雨（2020年7月3日から7月31日にかけて、熊本県を中心に九州や中部地方など日本各地で発生した集中豪雨のこと）によって天神地区でも土砂災害が発生したことを受け、今回は土砂災害を想定した訓練が実施されました。

当日は、市役所職員、町内の消防団20名程度が準備にかかり、シナリオと被害状況や危険区域の確認、情報共有が行われました。避難訓練についてはあらかじめ住民に知らされており、訓練開始と同時に家から出てきた住民を、避難場所であるユクサおすみ海の学校まで安全に誘導が行われました。

避難訓練に参加された方からは以下のようなお話をうかがいました（以下、学生のインタビューメモより）。また、参加されなかった方からは、自分の住んでいる家から避難場所が遠かったからという理由や、足が不自由、かつ急な階段や坂道があって安全でないという理由から参加しなかった（できなかった）というお話をうかがいました。

〈参加された方々の声〉

「毎年津波を想定した避難訓練はやっていましたが、土砂災害を想定したものは初。訓練にはほぼ毎年参加している。去年、台風のときには実際にユクサに避難した。停電が起こったときは驚いた。97歳の母がトイレが近くで大変だった。事前にホテルに宿泊する人もいた。」

元鹿屋市消防団長の方のお話

「地元の方は仲がいい。6～7割は高齢のため、今日の避難も歩くのが大変そうな人もいた。若い人がUターンしてきてくれたら嬉しい。ただ交通面が不便であるため、難しいと思っている。ユクサが建てられた時は、企業に完全に囲い込みされたら自分たちの唯一の遊ぶ場所がなくなってしまうため、地元住民も楽しめるような場所にしてほしいとお願いした。現在グラウンドを借りたりできるので、特に不満はない。キャンプに来ている多くの子どもを見て、非常に嬉しそうだった。」

高齢の女性の方のお話

「崖下に住んでいる。2、30年前に土砂崩れが起こった。その際に筆筒が落ちて来たが、消防団が助けてくれたことが印象に残っている。避難訓練の講習では、腰が悪く、椅子があると助かる。」

50代女性の方のお話

「住んでいるのは去年の土砂災害の被災した地域。もともと1986年の水害でこういった災害に心を傷つけられ、災害のことをとても怖く思っている。今では危険なときに水位を常に確認し、危なくなったら距離10分のホテルへ避難しにしている。」



町内会インタビュー

高齢の男性の方のお話

「防災訓練への参加は必要だと思う。子どもたちが近くにいないから、自分の命は自分でしっかり守りたい。」

「足が不自由のため、他の住民に人力車で運んでもらった。ある奥さんが人力車に座布団を置いてくれたので、座り心地が良かった。皆さんが助けてくれるので、安心。」

●ユクサおおすみ海の学校 <https://yukusa-ohsumi.jp/>

ユクサおおすみ海の学校は、120年の歴史をもち「日本一海に近い小学校」と言われていた鹿屋市立菅原小学校が2013年に廃校になり、その後、建物をリニューアルし、2017年にオープンした体験型宿泊施設+観光拠点施設です。地域の人もメンバーに入った「大隅家守舎」の役員と東京でリノベーションを手掛ける「ブルースタジオ」の役員によって構成された「株式会社 Katasudde」が運営をしています。地域の人が元気に活躍できる場、そして地域の人々がみんな外から来た人をおもてなしする場づくりが目指されています。ユクサおおすみ海の学校の取り組みや地域とのかかわりについてお話をうかがいました。



●天神町内会の方々との懇親会

避難訓練でお世話になった消防団の方をはじめ、天神町内会の方々と懇親を深める機会をつくっていただきました。市役所の方、ユクサおおすみ海の学校の方も参加されました。



●カンパチの水揚げ・えさやり体験

鹿屋市はカンパチの養殖をいち早く始めたところとしても有名で、全国で水揚げされるカンパチのおよそ20%を占めます。早朝からカンパチの水揚げの見学、えさやり体験をさせていただきました。



●菅原地域のまちづくりについて

鹿児島湾に面した海岸地区である菅原地域は、天神町、船間町、小野原町の3町内会で構成されます。これまでに、地域住民による地域づくりワークショップが開催され、地域の課題解決のための取り組みを「菅原地域まちづくり計画」という形でまとめられました。基本理念は『学び』を核にした交流によるアンチエイジングなまちづくりです。学問の神様である菅原道真公が祀られている菅原神社（通称：荒平天神）がこの地域のシンボルになっていることから、「学び」をテーマとして、ユ

鹿屋市漁業協同組合 <http://jf-kanoya.com/>

クサおすみ海の学校を拠点としながら、交流の機会の創出、地域の活気づくり、都市と地域の交流促進、若い世代の関係人口の増加などが取り組まれています。菅原地域のまちづくりがどのように進められてきたか、今どのような活動が取り組まれているかについてお話を聞き、実際にまちを歩き、耕作放棄地や空き家などに対する取り組みを視察しました。

●地域おこし協力隊について

地域おこし協力隊は、都市地域から過疎地域等に住民票を移動し、生活の拠点を移した者を、地方公共団体が委嘱する制度で、任期はおおむね1年以上3年以下とされています。鹿屋市でも、都市住民の移住・定住を促進し、その人材の地域での活動によって地域の活性化や産業振興を図るため、本制度が実施されています。2021年度、地域おこし協力隊として鹿屋市で活躍されている2人の方にお話をうかがいました。次期の新しい地域おこし協力隊は、「菅原地域まちづくり計画」に基づき、菅原地域で活動する「菅原地域づくりマネージャー」が募集され、2022年から活動がスタートするとのことです。



鹿屋市観光プロモーション動画

<https://www.city.kanoya.lg.jp/furusato-pr/douga.html>

鹿屋フィールドワーク2021報告会

日時：2022年1月19日(水) 18:00～19:30

場所：オンライン/ハイブリッド

鹿屋会場：天神町構造改善センター

大阪会場：大阪大学

内容：

- ・挨拶（稲場圭信大阪大学大学院教授）
- ・フィールドワークの概要（本誌、割愛）
- ・学生報告
- ・参加者全員で意見交流

（天神町内会の方々・菅原地域づくり協議会の方々・鹿屋市役所の方々 等）

- ・挨拶（川端亮大阪大学大学院教授）
- ・挨拶（上園勝己天神町内会長）

参加学生

趙夢盈・陳重道・川瀬純菜・中野立開・梅歩実（大阪大学人間科学研究科・人間科学部学生）

学生がフィールドワークで経験したこと、感じたこと、考えたことをお世話になった鹿屋の方々に報告し、意見交流する機会として報告会を開催しました。オンラインで大阪と鹿屋をつなぎ、鹿屋会場にはお世話になった天神町の住民の方々、市役所の方々に参加いただきました。以下は報告会の様子です（一部、割愛）。



大阪大学×鹿屋 in 鹿児島
フィールドワーク2021
報告会

2022年1月19日(水)
18:00～19:30

【オンライン/ハイブリッド開催】

鹿屋会場：天神町構造改善センター
大阪会場：大阪大学吹田キャンパス

参加希望の方は、QRコードを読み取り、参加申し込みフォームにご記入ください。オンライン参加希望の方には、ZOOMのURLを、会場参加希望の方には、会場情報をお送りします

2021年11月13日～15日、鹿児島県鹿屋市において、大阪大学の学生が防災や地域活性化などの社会課題について学ぶ鹿屋フィールドワークを実施しました。錦江湾に面し津波や土砂災害の危険性のある天神地区の町内会主催の避難訓練に参加し、住民の方にインタビューをするなど幅広く活動しました。また、この地域で取り組まれている地域活性化事業や地域おこし協力隊の話もお聞きしました。さらに、かんばちのえさやりに参加するなど、自然の豊かさにも触れることができました。

報告会では、フィールドワークで経験したこと、感じたこと、考えたことをお世話になった鹿屋の方々で共有したいと思います。フィールドワークでは、住民の方とコミュニケーションをとりながら、多面的・多角的に課題を捉えることができました。報告会でも、課題解決に向けたヒントやアイデアを住民の方と一緒に考えていけたらと思います。

文部科学省「実社会課題に対応するコミュニケーションの推進事業」（大阪大学）
「社会ソリューション・コミュニティ・育成事業」社会ソリューション・インイニシアティブ
問合せ先：ima@stu.osaka-u.ac.jp（担当：今井真由子）

- 【内容】
- ・挨拶（稲場圭信大阪大学大学院教授）
 - ・フィールドワークの概要
 - ・学生発表（趙夢盈さん・陳重道さん・川瀬純菜さん・中野立開さん・梅歩実さん）
 - ・参加者全員で意見交流（天神町内会の方々・菅原地域づくり協議会の方々・鹿屋市役所の方々等）
 - ・挨拶（鹿児島県鹿屋市役所）



参加申し込みはこちら

報告会のチラシ



鹿屋会場の様子



大阪会場の様子

挨拶 稲場圭信 (大阪大学大学院教授)

稲場: 大阪大学の稲場です。皆さん、こんばんは。報告会にご参加くださり、ありがとうございます。そして、とりわけ鹿屋の皆さん、私たち大阪から赴いたよそ者をいつも温かく迎え入れてくださり、ありがとうございます。

防災の取り組みから鹿屋の皆さんとの縁ができました。何かのきっかけで、ある土地を訪れる、それが交流人口の始まりともいえると思うんですけれども、その地域への関心が高まって、繰り返し訪れて、人と人、人と地域のつながりが生まれる。これが今、昨今いわれている、話題になっている関係人口だというふうには理解しています。

ただ、大事なのは、何か関係人口というときに、地方創生との取り組みとセットで、課題解決ということがよくいわれますけれども、課題解決ではなかなか人が集まらないと思うんですね。やはり楽しいこと、わくわくするような何かがある、魅力的なものがそこにある、そこに人は集まります。まさに鹿屋にはそういった人の魅力、また、自然、わくわくするようなもの、食べ物も含めて魅力があります。カンパチをいつもおいしくいただいています。そういったものがあって、人はやはり交流が深まっていくんだと。つまり、今までの課題解決型の目指すような取り組みというのから、人と人、地域と人が関わる、「すぞす関わり」への転換というのが、このフィールドワークでも私は大事だというふうには考えさせてもらっています。

私も大阪大学、そして学生ですね。鹿屋の皆さんと関わらせていただいて、鹿屋市が非常に自分と近いような、そういう思いが出てきてですね。たとえば昨年も、夏に鹿児島で水害が発生している、そういった中で「鹿屋は大丈夫かな」と心配になる。そこに、われわれの中にも、よそ者の中にも当事者意識が生まれてきている。一方で鹿屋の皆さん方は、やはり自分の生まれ育った地域に誇りを持って、愛着を持って過ごされている。そういった皆さん方が、われわれ大阪から行くよそ者、とりわけ学生と関わってくださって、そういった関係の中に、学生の中にも鹿屋に対する愛というのが、愛着というのが生まれているんだと思います。

今日、これから発表する5人は、学部生3人、院生2人ですけれども、鹿屋で皆さん方との関係の中でどのように感じたのか、どんなふうに見ているのか、どうぞ皆さん、リラックスしながらお聞きいただければと思います。私自身もとても楽しみにしております。今日はどうぞよろしくお願いたします。ありがとうございました。

報告 1: 川瀬純菜、中野立開、柁歩実

中野: 皆さん、こんにちは。大阪大学の学部4年の中野です。私たちの報告では、まず、どんなことをフィールドワークで



体験したのかというところを説明して、その後、私たちが感じた鹿屋市もしくは天神町の魅力というところと、聞き取り調査や、あとは交流の中で見えてきた町、もしくは鹿屋市の課題について説明し、このPBLという大阪大学の活動の意義について、最後に発表したいと思います。

■避難訓練への参加



まず、1日目に参加した避難訓練の様子を説明します。天神町では毎年、地震を想定した避難訓練を行っていて、今年は土砂災害を想定した避難訓練が行われました。というのも、おととしに大きな風水害があって、土砂崩れが起きたという経験があり、それを基に今回は土砂災害を想定した避難訓練が行われました。そこに学生の私たちも参加させていただきました。

この避難訓練というのは、事前に町内会の消防団の方々が企画していて、住民の方々にお知らせして、当日は早めに消防団の方々が集まり、避難訓練スタートとなったら住民の方々が避難するという形になります。避難先は、この後にも話が出るんですが、「ユクサおおすみ」という、昔の学校を改築した宿泊施設に移動するというのが、全体のプログラムでした。



これは避難訓練が始まる前の打ち合わせの様子です。打ち合わせとして、土砂崩れが起きたことを想定したポイントと、そこからの避難経路をそれぞれ確認しています。これは、消防団の方々がそれぞれ確認していた内容を、私たち学生が飛び入りで参加したので、地図を使って説明していただいた時の様子です。正直に言うと、避難訓練はどういうことを

するのかを全然知らなかったので、こんなにしっかり地図を使って、どういうことを考えてやるのか、というのを本格的
するとは思っていませんでしたので、とてもびっくりしました。

避難訓練



打ち合わせが終わった後はいくつかのグループに分かれて、地域内の各ポイントで消防団の方々がそれぞれ待機して、決められた避難経路を確認しながら、地域の方々を避難場所であるユクサに誘導するという流れになります。そのグループ分けの中に学生も何人か散らばって入り、待機している間、つまり住民の方々が避難してくるまでの間に、消防団の方々にどういう経緯でこの避難訓練が始まったのかとか、どういうふうに避難訓練が毎年行われているかということを知ることができました。

避難訓練



住民の誘導が終わって、皆さんがユクサのほうに移動してきた後です。この写真にあるのがユクサおおすみという宿泊施設のグラウンドになるのですが、そこに皆さんが集まって、自分たち学生と消防団の方々もそちらに移動しました。ここでは消防団の会長さんや、市役所の防災関係の担当をしている方々が講話をされました。防災意識の話や、災害で避難するときにどういう心構えでいけばいいのかとか、どういうものを持っていけばいいのかという話をされていました。参加人数としては住民の方々が40人ほど参加されていました。多くの方が参加しているんだと驚かされました。

避難訓練が終わり、講話が終わった段階で、全部の避難訓練のプログラムは終了でしたが、私たちは避難訓練に参加した方々に聞き取り調査をさせていただきました。内容としては、この避難訓練に参加するようになったきっかけや、どういう心持ちやどういう態度で参加しているのかということ、あとは、天神町に毎年どういうふうな災害が起きるのかとか、もっとフランクに、どういうことに困っているか、どういう土地になっているのかみたいな、そういう話を聞か

避難訓練



せていただきました。

避難訓練ということ自体、さっきも言ったんですが、大阪では全然したこともないし、参加したこともないという感じだったんですが、この町は台風とかも結構直撃する地域ということで、やっぱり皆さんが危機意識を持って積極的に参加しているということを知り、そのギャップ、防災の意識の高さに驚かされました。

■ユクサおおすみ海の学校のお話

ユクサおおすみ海の学校



川瀬: 皆さま、お久しぶりです。学部4年の川瀬です。私からはユクサおおすみ海の学校での経験や、印象に残ったことをお伝えしたいと思います。

避難訓練の後、このユクサを運営されている繁昌さんから話を伺いました。繁昌さんからはユクサ設立のいきさつや、繁昌さんご自身がどういったいきさつで鹿屋に来られたかという話を伺いました。私たち学生の中で、結構、地域づくりや地方での暮らし方に関心を持っている学生がすごく多くて、そういった点で大変勉強になりました。

特に私自身が印象深かったのは、当時、繁昌さんが地域おこし協力隊だった時に、ユクサ設立メンバーとして誘われたというお話で、そのきっかけがすごく偶然だったということをお伺いして、どんな縁が鹿屋や地方への移住に結び付くか分からないというふうに感じて、人と地域の接点というのはすごくさまざまなんだというふうに感じました。

ちなみにこの部屋は、ユクサの昔の教室を改装した部屋となっていて、私たち学生がプロジェクターでスライドを見ているところになります。こういった木の机や椅子も、昔の学校にあったものをそのまま使用しているということで、すごく懐かしい雰囲気を感じました。

こちらは日が落ちてきた頃に、校庭に出てみんなで夕日を眺めた時の写真です。校庭にツリーハウスがあることに私



たち自身がすごくワクワクして、子ども心に帰ったふうになってツリーハウスに上って景色を見ることができました。校庭の下に下りることができるようになって、海辺に出て、みんなで鹿児島湾の夕日を眺めることができました。大阪にいと、やっぱり海に出るといのがなかなか珍しい経験で、鹿屋の方はすごく、もしかしたら当然、当たり前のように思われている景色かもしれないんですが、私たちにとってはすごく新鮮で美しい景色だというふうに感じました。

日が落ちてきた頃にまた校庭のほうに出て、今度は町内会の方や市役所の方と一緒に、たき火を囲んでお話を伺う機



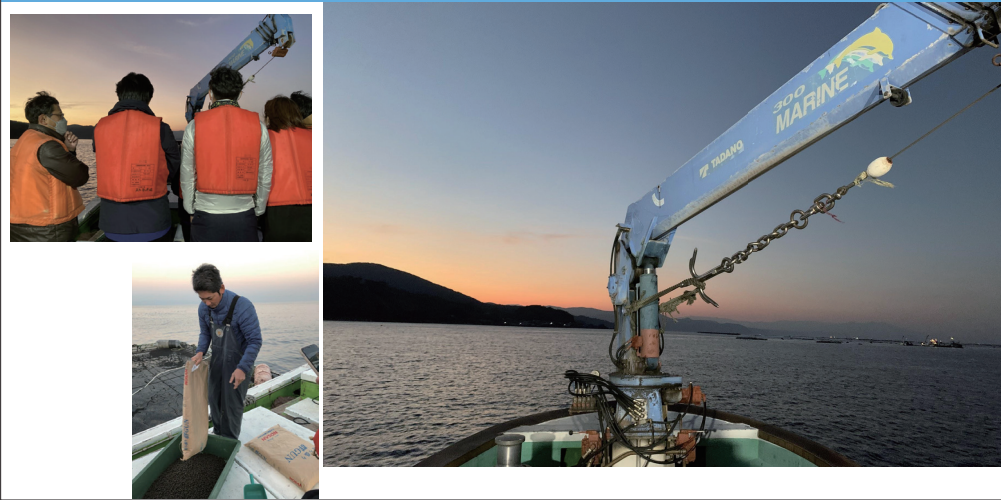
会がありました。ここではすごく皆さんフランクに、親しみやすくお話をさせていただくことができ、たとえば地域の方の本音や考えなどを深く伺うことができ、すごく良かったというふうに感じました。天体観測だったりだとか、キャンプだとか、そういったことがこのユクサではできるので、本当に私たち若者にとってすごく魅力的に映る場所だというふうに感じました。

■カンパチの水揚げ漁・餌やり

梅：皆さん、お久しぶりです。梅です。ちょっと余談なんですけど、先日、「かのやファン倶楽部」のプレゼント企画が当選しまして、大阪の下宿先に久保醸造様のドレッシングが3種類届きました。ありがとうございます。

私はこの間のPBLの関連で、カンパチの水揚げ漁について感想をお話します。早朝、4時すぎぐらいに私たちは起きて、市役所の鳥越さんに案内していただいて、漁師の柿内隆幸さんと一緒に、カンパチの水揚げを体験させてい

カンパチの水揚げ漁



いただきました。水揚げじゃないですね、餌やりですね。本当に餌をばらまいて、カンパチがいっぱい口を開けてという、生の体験をさせていただいたんですが、本当に凍えるような寒さだったんです。その中で人の温かさというものをすごく感じました。

柿内さんのお話で、鳥越さんとの関係性についてお伺いした時に、「鳥越さんのお人柄があるからこそ、頼りたいなというふうに思える」というご発言や、特に自分たちはいつも忙しくて、お客さんを呼び込むことができないんだけど、鳥越さんが代わりにお客さんを連れてきてくださったりだとか、本当にいろいろ助けられている部分があるというふうなお話がありました。市役所の人と地元の人との間で強い信頼関係ができていることは、地元の方が何か挑戦したいというときに自治体がうまくサポートできる、そんな可能性があるんじゃないかなと思って、私はすごくそこが魅力に感じました。

個人的には離島の出身ということもあって、海にも幼い頃からよく連れ出してもらっていたんですが、コロナでなかなか地元に戻れない中で、この短期間の間に鹿屋市に3回訪問させていただいたのは、里帰りしたような気分になって、本当に心のよりどころのように感じました。関西・関東圏で人とのつながりみたいなのを求める若者が最近増えてきているんですが、同じように鹿屋をふるさとのように感じる、そういう若者が今後増えていくんじゃないかなというふうに感じました。

■「よそ者」の視点からの鹿屋の魅力

ここまで、体験の感想をお話しましたが、続いて、私たちはもともと鹿屋市になかなか縁もゆかりもない人間なんですが、そういったよそ者の視点から鹿屋市にこんな魅力があるというふうに、地元の方だとなかなか気付かない点も

鹿屋市の魅力 「よそ者」の視点から

歴史



体験



景観



食

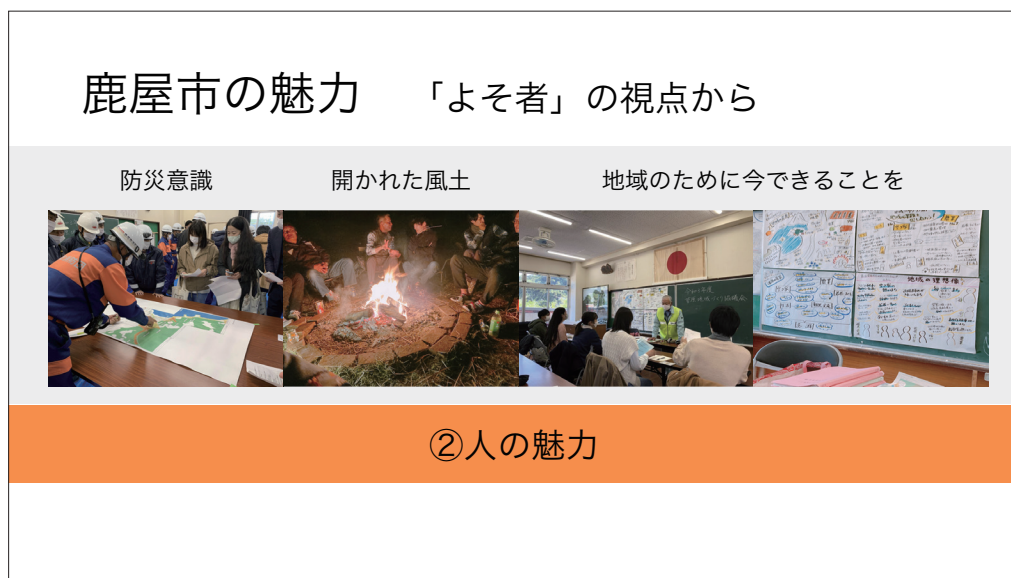


①場の資源 自然の魅力

お話しできるのではないかと考えて、あらためて鹿屋市の魅力をたくさん挙げさせていただきました。

まずは、「場の資源 自然の魅力」ということで、歴史的な建物、荒平天神だとか、そういった雰囲気が一つ、あとは体験型の施設、ユクサおすみ海の学校など、そういった体験できる施設もあるという魅力。そして、自然の景観。サンセットだったりとか、海だとか、鹿屋市からも桜島が眺められて、そういった景観が素晴らしいと感じたのと、最後は、私が一番魅力的だと感じたのは食の部分ですね。毎食のようにカンパチを食べさせていただいて。カンパチだけじゃなくて、私はちょっと飲めないんですが、お酒も皆さんがすごく楽しそうに飲んでいらっやって、本当にそこが魅力だと感じました。

続いて、注目したいのが「人の魅力」です。鹿屋に住んでいらっやる人、皆さまと交流させていただいて、本当に人



の魅力が素晴らしいというふうに感じました。1点目としては、防災意識の高さです。災害が多く発生する地域ということもあると思うんですが、実際、鹿屋市以外のところに目を向けてみると、住民の方が主体的にここまで防災に取り組める、そんな地域は珍しいんじゃないかなというふうに思います。皆さまの防災意識の高さは本当に魅力だと感じます。

2枚目にたき火の写真があるんですが、こんなよそ者を、急に来た若者でも、あとは地元の方と市役所の方の距離感というのもそうなんですが、すごく welcome な雰囲気で、開かれた風土だというふうに感じました。よそ者を受け入れる風土といえますか、そういったのは将来の可能性にもすごく通じるんじゃないかなというふうに感じています。

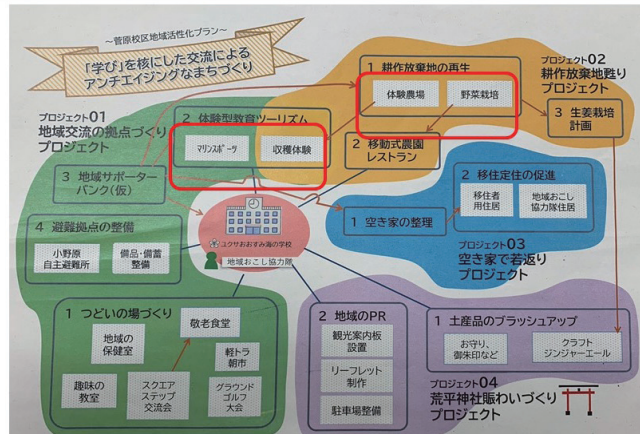
■学生の一アイデア

最後に、皆さまが地域のために今できることを積極的に行っていらっやる、その意識が本当に素晴らしいと感じました。こちらは、天神町内会の黒板に、皆さんがワークショップを通じて魅力について書いていらっやる紙がたくさん貼ってあったものを写真で撮りました。こういったところ、皆さまが主体的に地域について今考えようとしている、今できることをやろうとしている、その意識に本当に心を動かされました。

川瀬:こういった人の魅力であったりだとか、それから天神町内の場の資源であったりだとか、そういったところをもっと生かして、何かもっとたくさんできるのではないかとというふうに考えました。そこで、私たち学生の一アイデアを紹介したいと思います。今現在、この天神町内では、体験型教育ツーリズムや収穫体験のような企画などを行っていらっやるというふうにお伺いしました。それだけではなくて、天神町だけではなくて、例えば他の地域の観光地の取り組みと連携しながら、また一つの鹿屋の体験型ツーリズムというのを実施できるのではないかとというふうに考えました。

そういったときに、この「aini (アイニ)」というネット上のプラットフォームがあるんですが、そういったプラットフォームを使いながら参加者を募集できるのではないかとというふうに考えました。この aini というプラットフォームについてなんですが、これはたとえば、広告代理店が大々的に広告するような大型のツアーではなくて、例えば収穫体験であったりだとか、このキャンプであったり、そういったローカルなツアーを実施したい地域の方と、そういったツアーに参加したい参加者をマッチングするプラットフォームです。こういったプラットフォームを使いながらうまく参加者を募集して

学生のアイデア



写真：「菅原地域まちづくり計画」より

学生のアイデア



夢が集まる
体験プラットフォーム

※はじめてのことでも安心して参加できる体験プラットフォーム。みんなが夢を共有し、一緒に楽しもう。

体験を探す 体験を開催する

体験型ツアー

「aini」などのプラットフォームを利用



<https://helloaini.com/>

いくつかで、鹿屋の魅力を十分に発信していけるのではないかとというふうに私たちは考えました。

■聞き取りや交流を通して見えてきた地域の課題

中野:最後に、市役所の方々への聞き取りや町内会の方々への聞き取り、または交流から見えてきた、市もしくは天神町の課題についてお話しします。

市役所の方々からの聞き取り、または交流で思ったのが、以下の3点になります。1つ目が、市役所内の市の活動の引き継ぎがあまりできていないというところ。2つ目が、市と各町内の連携が難しいというところ。3つ目が、これは市の課題というよりも、市から各町に対するニーズみたいな形になるんですが、各町の経済的自立ができていないというところです。

1つ目の点としては、現在の地域おこし協力隊の方が2年前からSNSやYouTubeを利用した鹿屋の広告を始めているんですが、なかなか引き継いで仕事をしてくれる人がいないという課題を、地域おこし協力隊の方々からお聞きしました。

2つ目に関しては、町内会で行われている取り組み、例えば避難訓練、あとは会長さんが町のニュースを皆さんに知らせるために作っている町内会新聞など、そういういろいろな取り組みをやっていらっしゃると思うんですが、その取り組みや、もしくはその改善を手伝いたいけれど、やっぱり市役所の役人としてはどれだけ手を貸したり、口を出しているのかということをおっしゃっていました。

3つ目が、これは市長さんからお伺いしたんですが、「市からの補助金ありきではなくて、自分たちで稼ぐ力を付けてほしい」ということをおっしゃっていました。市役所の方々からの聞き取り・交流では、このような課題が見えてきました。

課題

市役所の方々からの聞き取り、交流にて

- 活動の引き継ぎができていない
- 市と町内の連携が難しい
- 各町の経済的自立

地域おこし協力隊が、SNSやyoutubeを利用した広告を始めたが、引き継ぐ人がいない...

町内会の取り組みやその改善を手伝いたいが、どれほど口を出しているのか...

市から補助金ありきではなく、「稼ぐ力」を付けて欲しい。

続いて、天神町の方々からの聞き取り、もしくは避難訓練などに参加したり交流会などを経験して、私たちが感じた課題について述べさせていただきたいと思います。

1つがリーダー頼りにになっていないかという懸念点と、2つ目は高齢化・人口流出が著しいという点になります。1つ目は、避難訓練の実施と、あとはその全体の流れを見ていて、私が個人的に感じたんですが、上菌会長さんが結構前

課題

町内の方々からの聞き取り、交流にて

- リーダー頼りにになっていないか
- 高齢化・人口流出が著しい

・上菌さん（会長）の負担が大きいのではないか。
・後継となる人はいるのか。

高齢者がほとんどで、若い人がいない。「人口を増やすことこそしたい。」

線に立って、どこのグループはどこに行ってという点呼も行っていたんですが、やっぱり会長さんが全て1人で担っている部分が多く感じられ、負担が大きいのではないかと思いました。また、後継となる人物はいらっしゃるのかなということも思いました。

2つ目の高齢化・人口流出が著しいということは、鹿児島全体の課題だと思うんですが、私が避難訓練に参加したり、町内を案内してもらった時に、町の方々と会ったりするんですが、やっぱり高齢者が多くて、若い人が全然いないというの。あとは町の人からの聞き取りで、いろんな取り組みをやるのは楽しいからいいけれども、やっぱり人口を増やすことこそがしたいという話をお伺いして、ここはやっぱり大きな問題点、課題になるかなというのを感じました。

このような課題、たとえば取り組みの引き継ぎや、活動を次の方に任せたりということ、あとは目標となる人口流出・高齢化にどのようにして対応するのか、各町の経済的自立をどういうふうに達成するのかというのは、やっぱり結構大きな問題となっていて、特に高齢化が進む日本で、地域が地方であればあるほど、どこでもぶつかる問題だと思うんですが、やっぱりその中で、今行っている取り組みをいかに継続していくかというのが重要になるかなと思いました。そして、地域を継続的に支える担い手を増やすことが必要になるかなと思いました。

課題

市役所の方から

- 地域おこし協力隊の引き継ぎ
- 市と町内の連携
- 各町の経済的自立

町の様子から

- リーダー頼りな活動
- 人口流出、高齢化

取り組みをいかに継続していくかが重要

そして、地域を継続的に支える「担い手」を増やすことが必要。

■学生にできること

これはもう本当に当たり前のことにはなるんですが、その中でこの今回の PBL、学生たちが実際にその地域の方々と交流したり、いろんなことを体験したりする中で行う、この PBL の活動を通して、私たち学生はこの継続のために貢献できるんじゃないかなというのを思いました。

PBLを通して

「継続」のために、私達にできること

- 学習や経験を、地域にフィードバック
- 地域づくりの企画や実行に携わる
- 次年度の学生に引き継ぎ、プログラム自体を継続的なものにする

具体的には3点で、1つ目は今回行ったような、この学習や経験をその地域の人たちに、たとえば今の発表のように、どれほど皆さまの利になっているかはちょっと自信が分からないんですが、フィードバックさせていただいて、今後の活動の利としていただければと思います。

2つ目は、この地域づくりの企画や実行に、私たち学生がお手伝いしたり携わることで、継続的な取り組みの実施につながるかなと思いました。

3つ目は、この PBL の取り組みを私たち学生、私たちの代だけで終わらせるんじゃなくて、次の年度の学生に引き継ぐことによって、PBL というプログラムと、鹿屋市もしくは天神町とのつながり自体をどんどん継続していくものにできるんじゃないかなというのを思いました。

最後になりますが、鹿屋市に行って、天神町でいろいろな経験をさせていただきました。左はカンパチの水揚げ漁の写真で、真ん中は地域おこし協力隊の方々に話を聞いたり、3つ目は市長さんにお話を聞いたりという、このどれを取っても大阪では絶対にできない体験ですし、自分たちがただどこかに行っただけでは絶対にできないような、とてもとても貴重な体験をさせていただいて、本当に鹿屋の皆さまには大変お世話になりました。また今年も何かの形でお邪魔するかもしれないので、その時はどうぞよろしくお願いいたします。以上で発表は終わりになります。ご清聴ありがとうございます。

鹿屋の皆様、大変お世話になりました！



いました。

報告 2：趙夢盈

趙：皆さま、こんばんは。大阪大学の趙夢盈です。このたびは大変お世話になりました。ありがとうございます。先ほど、うちの素晴らしい後輩たちが、今回のフィールドワークの内容について発表しましたので、私は個人的な感想を発表させていただきます。よろしくお願いいたします。

今回、鹿屋市にフィールドワークに行くチャンスももらって、とてもうれしかったです。人生初の憧れの九州に行けて、



長く生活している関西と違う風土を体験できました。さらに、天神町内の防災訓練にも参加ができて、災害の多い地方で皆さまが実践している防災活動の様子や災害に備える思いを知ることができました。また、地域社会に存在するさまざまな問題を自分の目で確かめることができ、自分の研究にも大きなヒントをいただきました。

天神町は自然が豊かな地域である半面、災害も多い地域なんですね。皆さまが実践している防災活動の甲斐もあり、幸い、防災意識の強い町内会長さんと町内の皆さまのおかげで、ここ数年、人身被害が発生しませんでした。しかし、これから全域で少子高齢化が進むと、将来の防災活動はどうなるのか、ちょっと心配になりました。しかしながら、市の職員さんたちが地域のために懸命に考え、働く姿を目にすると、その地域への愛情と責任感に感動しました。このような職員さんたちと町内の皆さまが協力すれば、これからもきっと大丈夫だろうと勝手に安心しました。

今回鹿屋市にフィールドワークに行く機会をもらい、非常に嬉しかった。

人生初に憧れの九州に行き、長く生活している関西と違う風土を体験できた。

天神町町内の防災訓練にも参加でき、災害の多い地方で、皆様が実践している防災活動の様子や、災害に備える思いを知ることができた。

地域社会に存在する諸問題を自分の目で見て確かめることができ、自分の研究にも大きなヒントを与えてくれた。



天神町の防災訓練

天神町は自然豊かな地域である反面、自然災害の発生リスクが高い。

非常に防災意識の強い町内会長と、住民の皆様のおかげで、ここ数年、人身被害が発生しなかった。

これから全地域少子高齢化の進みによって、将来の防災活動に懸念を感じる。

しかしながら、市の職員は地域を愛し、懸命に考え、働いている。私はその姿と責任感到感動された。



ユクサ海の学校については、その面白さと独特の雰囲気到大変魅了されました。将来チャンスがあれば、家族や友人たちと一緒にまた観光しに行きたいと考えています。ただ、宿泊施設であるのに、昔の教室のような大きい部屋は、現在の少人数、小規模の旅行ブームとちょっとずれがあるんじゃないかなと感じました。2段ベッドがずらりと並んでい

ユクサ海の学校

ユクサ海の学校については、その面白さ、特独な雰囲気到大変魅了された。

宿泊施設なのに、昔教室である大きな部屋は、現在少人数、小規模の旅行ブームとずれがある。

部屋の間取りについても、さらに考える必要がある。



る部屋は、個人のお客さまにとって選択しにくいかなと思いました。コロナの悪影響もあるので、できれば部屋を区切れる仕組みを導入していただければうれしいと思います。

■新しい観光名所をつくる

最後に、天神町に多数存在している、人が住めない空き家について、たぶん実際にやるのは難しいかもしれないんですけど、今の段階で青くさい自分のアイデアというものを述べていきたいと思います。まず、持ち主の許可があれば、家の中や周辺に花の種をまいて、花屋敷というものをつくるのはどうでしょうか。コスモスのような世話が要らない花で十分なので、こういう空き家と生き生きとした美しい花が折り合った風景となります。このように、ユクサ海の学校に泊まりに来られるお客さまにも、もう一つの楽しみが増えるんじゃないかなと思いました。市長さんからも、学生た



上段写真：天神町にて撮影

下段写真：出典 https://www.huffingtonpost.jp/2015/05/20/abandoned-house-flowers_n_7340742.html 等

ちに「鹿屋市の観光スポットを発見してもらいたい」という宿題を出していただきましたが、むしろ新しい、いいところをつくるのも面白いんじゃないかなと私は考えました。

今回のフィールドワークが無事に終わったのは、たくさんの方々の協力があったからこそできました。特に地元の住民の方々にはよそ者である私たちを招待して、さまざまなことを教えて、孫や孫娘のようにかわいがってくださいました。特にその中に、株式会社フェスティバロの藺田直子さんから、2回もわざわざお土産を贈っていただきました。また、鹿



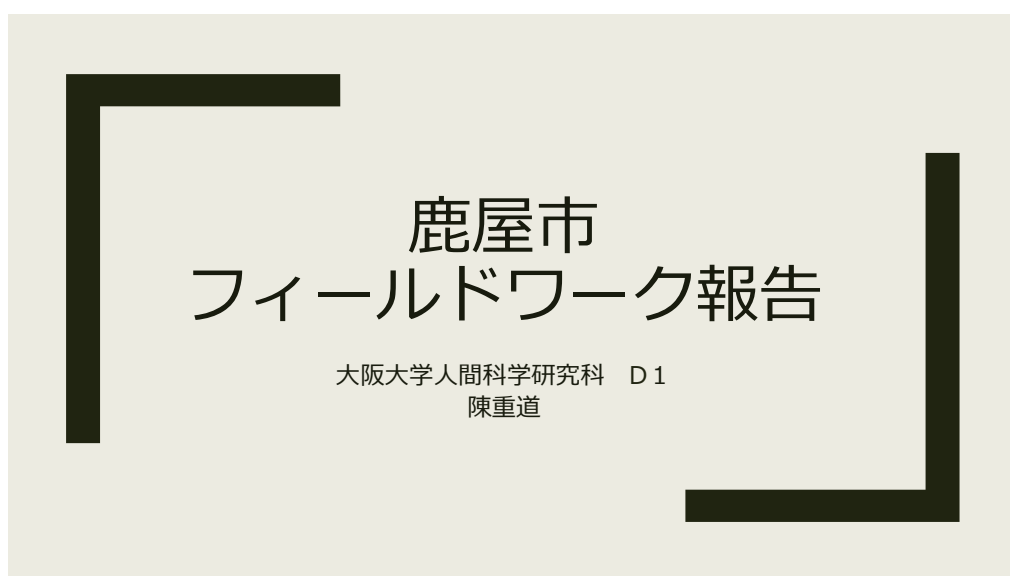
屋市の職員さんたちも私たちを見守り、サポートをし、期待してくれました。ここで全ての皆さまにお礼を申し上げます。ありがとうございます。

さらに、このような温かい人たちこそが鹿屋市の立派な資源であると私は悟りました。これからも鹿屋市の情報をできる限り多くの人々に発信し、鹿屋市と一緒に成長していきたいと私は思います。私からの発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

報告 3：陳重道

陳：こんばんは。私は大阪大学人間科学研究科D1の陳重道と申します。今から、今回のフィールドワークについてご報告させていただきますと思います。

まず活動を振り返るという部分を一応設けてみましたけれども、ほとんどの内容が全て、さっきの先輩と後輩に紹介していただいたので、ここはポイントだけ言わせていただきます。天神町での避難訓練で特に印象に残ったのが、消防団によってこの避難訓練が毎年、自発的に行われて、かつ、参加者の比率も結構多かったということが1つ。もう一つ



はこういう避難訓練によって移動困難者と要救助者の事前把握と対応ができているというところ。実際に私が見たのは、人力車で移動困難者を運ぶとか、そういう仕組みを事前に準備できているというところに、自分は感心いたしました。

最後は、災害種別に、この違いによる訓練内容のアレンジが毎年されているところ。毎年とはいかないけれども、2

天神町での避難訓練



- ・消防団によって毎年自発的に行われ、参加者も比率的には多かった
- ・移動困難者と要救助者の事前把握と対応に役立つ
- ・災害種別の違いによる訓練内容のアレンジ

～3年ぐらいのパターン、そういうペースでアレンジされているというところを、自分はとても有効的だというふうに思いました。特に、私が今住んでいる大阪なんですけれども、学校のほうで一応、避難訓練はあるんですが、地域のほうで避難訓練は、一応、通知はあったというような気はしますが、皆が参加するかどうかという、あんまり参加しないものなので、天神町の避難訓練に参加するまでは住んでいる地域でどこに避難すればいいのか、全然気にしていませんでした。こういう訓練が地域で引き続き展開されていくのはすごく素晴らしいことだなというふうに思いました。

次に、私たちが今回関わったもう一つの大きな活動としては、地域づくりの活動です。地域づくりの活動に関する紹介を、会長さんと市役所の橋口さんとユクサの繁昌さん、皆さまからご紹介していただいて、その中で印象に残ったこと、とてもインパクトを受けたのが、まず廃校ホテルです。観光スポットとして再利用し、さらにそれを中心に地域の復興を図る。こういう発想がとても新鮮で、自分の人生というか世界観がまた一つ、新たな扉が開いたような感じでした。

その後は、実際に2日間、天神町を歩いて、その周りを体験して自分が思ったのは、やっぱりこの天神、ユクサ周辺

菅原地域づくり



・廃校をホテル、又は観光スポットとして再利用し、さらにそれを中心に地域の復興を図る
新鮮な発想

・天神-ユクサ周辺での観光資源の豊かさ

での観光資源がとても豊かということですね。例えば荒平天神だとか、ユクサ海の学校だとか、そして何よりも天神町に住んでいる皆さまの温かい受け入れ、そういう人と人との関わりがすごく享受できる町として、そういう観光資源の豊かな町という印象を受けました。

■新たな生きがいをつくる

以上が振り返りの部分で、この後は今回の活動を通じた私の感想に当たる部分になります。まず、地域づくり活動における生きがいということです。菅原の地域づくり活動自体、私の理解では一時期のものではなくて、本当にこれからずっと長い間続けていって、地域の復興だったり、自立して自分たちで稼いでいけるような、そういう基準になれるまでの活動なので、それはとても長期間の活動です。実際に参加されている天神町在住、菅原地域在住の皆さまの動機というか、そういう活動を持続していくための要因だとか、そういうのを維持したり、新たに発見していくことがとても重要ではないかというふうに思いました。

実際の話によれば、こういう地域づくり活動でこれまでの生活パターンが変わっていったり、グラウンドゴルフだとか、そういう生きがいを手放したこともあれば、新たに、例えば私たちという外来者との交流ができるだとか、または普段、昔なら絶対にしないような観光用の畑作りだとか、そういう構想をすることができて、それが皆さまの新たな生きがいという、そういう活動の中から皆さまが新たな生きがいを発見できて、新たなこういう活動を持続していく理由として認識できたらいいなというふうに私は思っています。

そういう持続の動機は個人それぞれなので、私のアイデアとしてはこういう地域づくり活動を継続していく中で、連絡会を定期的にかけて、まさに今、皆さんがいらっしゃる場所で連絡会を開いて、皆さんそれぞれが今の活動の中で思った楽しかったことをシェアして、そういう楽しさを皆さんで確かめ合いつつ、活動を継続していくのが大事なんじゃないかなというふうに思いました。

次の課題としては空き家の整理ですね。空き家の整理といっても、それに関連付けるような課題ですが、一応、計

生き甲斐と地域づくり活動

- 活動を持続していくための動機
- 地域づくり活動で手放した生き甲斐と新たな生き甲斐の発見
- 持続動機は個人それぞれ
⇒定期的な連絡会で確かめ合う

画の構想図の中の空き家整理の部分は、空き家を改装して、新たな移住先として、または地域おこし協力隊の住居として活用するという話でした。私が思ったのはそれと同時に、今は住んでいない空き家であっても、今は住んでいないけれども、家主とか、先祖がここに住んでいて、でも、その先祖が他界して、自分が地域に戻らなくなったという、そういう家主に地域に帰っていただくことも大事なんじゃないかなというふうに思いました。帰るというのは帰省先としても、

空き家の整理

- 帰省先としても、Uターン就職の地としても、菅原地域、天神町という地にゆかりのある方々を呼び戻すのが大事。
⇒
町の活性化による発信。まずは休む場所として
戻ってきた方が新たな宣伝口となる

旅行先としても、そしてUターンの就職地としても、何でもいいので皆さんを呼び戻すことについても、今後の地域づくり活動の課題として考えていく必要はあるんじゃないかなというふうに思いました。

そのために何ができるのかというと、今の地域づくり活動をしつつ、町が活性化していく様子を発信すること。それはまさに今、市役所の政岡さんが着手しているPR、宣伝の活動でもあります。そして、そういう方に戻っていただくことによって、そういう方がたがここに帰って住まなくても、また自分が働くというか、今住んでいる所に戻って、「私の故郷はそういうふうになっていて、すごく素晴らしい場所なので、皆さんもぜひ機会があれば来てください」というふうに、新たな宣伝の口になってもらうというのも理想的な状態ではないかなというふうに思いました。すみません、ちょっとまとまらないんだけど、私の発表は以上となります。ご清聴ありがとうございました。

意見交流

■距離を超えたつながりをどうつくっていきけるか

鳥越: 地域活力推進課の鳥越です。報告ありがとうございました。まず趙さんからですが、先ほど空き家のことで、すごくお花で飾った空き家があって、非常に私たちも空き家対策に苦労はしているんですね。だけど、ああいう発想というのは正直なかったもので、すごく新鮮でした。どこかで調べられたのかもしれないんですが、私たちはもうちょっとそういう調査というか、いろいろ事例を調べるのが足りないと思って、いいアイデアを頂いたかなと思って、すごくほんわかした雰囲気させてもらいました。ありがとうございました。

それと、今日はユクサの関係者が来ていないんですけれども、宿泊施設ですね。割と宿泊者たちをオープンに迎える、みたいな風潮は今まであったと思うんですけれども、コロナ禍だったりとか、プライベートの確保とか、そういう点について、貴重な意見だと思うので、ユクサのスタッフの方々に伝えておきます。ありがとうございました。



それから、中野君と川瀬さん、梅さんのところと、あと、陳さんの報告で出た地域との関わりについてです。この距離がある中でどうやって保っていくかというのは、私たち市役所側としてもどういう仕組みでやっていくかというのはすごく考えています。特に今、天神とかユクサとか、いろんな方に来ていただいているんですが、大阪大学さんからこういう形で来ていただきましたが、他からも毎年来ていただくことができているんですけれども、1回来ていただいた方、本当にこの地域の方々だったりとか、この地域だったりとか、そういうものにすごく感銘をしていただいて、すごく好印象で鹿屋のファンになって帰ってもらっています。先ほどから出ているように、関係をどうやって持続していくかということを検討していかないといけないんですけれども、あまり負担を掛けたくないということも思います。

先ほど、陳さんのほうから、持続的な動機は個人個人それぞれにあるだろうから、連絡会みたいな定期的な連絡会をするとか、いろいろご提案を頂いたんですけれども、正直、学生さんたちが今回関わってみて、どんなコミュニケーションを取っていると定期的に鹿屋を思い出したりとか、皆さんが大阪で生活をする中で鹿屋を思い出しやすくなるか、何かこういう方法があるんじゃないかというのがあったら教えてほしいです。

■第三者の立場で学生がコミュニケーションの間に入る

中野: 鳥越さん、ご質問ありがとうございます。お久しぶりです。中野です。

まず1つ目、関係をどう維持していきけるかで、地域と市の関わりというところをどういうふうにつなげるのかは結構難しいというのはあったと思うんですが、今ぱっと思い付く感じで話すので、結構ふわっとして、かつ、あんまり深い話ができないと思うんですけれども。

市と町内会の関わりで言えば、やっぱりどちらも利益、利害の不一致とかがあると思うので、そこで第三者的な立場の学生というのを間に入れることで、そのコミュニケーションが1個、円滑に行くんじゃないかなというのを、フィールドワーク中に皆さんと関わって思いました。特に交流会の後のたき火をしている時に、学生、市の方、町内の方、ユクサの方、みたいな、結構ばらばらな、いろんな属性がある中で、どんどんしゃべっていくという、しかもめちゃくちゃフランクにしゃべっていくというコミュニケーションをした時に思いました。

次に、鹿屋市もしくは天神町と他の地域の関わりをどうやってつなげていくのかというのは、大学、学生というところと言うと、一学生としてできることというよりも、大学にお願いしたいことみたいになるんですけれども。地域創生、地域の活性化というのは、日本で結構どこでも課題としてあって、それに対して関心のある学生というのは結構いると思います。そういう授業の一環として例えば訪れて、その後、じゃあ体験したことから、今、実際に他の地域で行われている事例と比較して、鹿屋でできることは何なのかとか、あとは天神町でできていないことは何なのかという、そういうふうに授業と絡めていただければ、学生としてまた新しく勉強する中でのヒントになると思いますし、そういう形

でお互いに、特に大学側が利益があれば継続的な関係になるんじゃないかなというの思います。

どういときに鹿屋のことを思い出して、また行きたいと思うかという、学生という身分の中で、これだけ大人の皆さま方とこれだけ深く関わられるというのが、やっぱり貴重な経験でした。この授業とか、学校のプログラムの一環としてでもこういうふうに関わることができたら、何かこれから自分の研究を進めていくときにも、あの時に市の方から言われたこと、町内の皆さま方が考えていたことというのは、やっぱりどうしても思い出して、それを生かしているというふうになると思います。こういうふうな深い交流は、やっぱりこれからの自分が何かぶつかったときに思い出すことになるかなというのを思いました。ちょっと、3つ目の答えだけふわふわな感じになったんですけども、以上になります。

■大学生に向けたふるさと感のアピール

梅:鳥越さん、先日はありがとうございました。私がさっき発表でもちょっと話したんですけども、鹿屋市の独特のふるさと感みたいなところをもっとアピールしていくというのは、すごくいいことじゃないかなというふうに感じています。

まず1つ目として、鹿屋市は海も山も食も、自然とかそういうのがすごく多様性があるというふうにして、それはいろんな人のふるさと感に合うかと思っていて。都市とかで、人とのつながりが欲しいという、コロナ禍とかでも感じる人もいますし。あとは、私は今、大学生で1人暮らしをしているんですけども、例えば地域の防災訓練とかの案内がなかなか来なかったりとか、ご近所付き合いとかもなかなか大学生はしづらくて、結構、孤立感というのは地域の中で感じることが多いです。その中で、そのふるさと感という多様なアピールポイントを、大学生というターゲットとかに絞ってみたいするとアプローチしやすいんじゃないかなというふうに感じました。さっき中野さんが言った、大学の授業に組み込むとか、プログラムに入れるとかもそうですし、私たちはこうやってつながっているの、何か力になればとは思ってんですけども。



関係人口の話とかに私も結構興味があるんですが、結局、大きな関係人口として成功している事例とかを見ると、1人の方のすごく大きなイノベーションがあったりとか、そういったのがきっかけになって大きなことに発展しているんじゃないかなというふうに感じています。

大学や大学生とのつながりをつくることによって、将来のそういったイノベーションというか、本当に地域のキーパーソンとなるような人とつながる可能性というものもすごく広がると思うので、この大学生というところと

ふるさと感というところを少しキーポイントにしてもいいんじゃないかなというふうに、今ぱっと思い付いた意見なんですけれども、感じました。

あと、私自身はドレッシングが届いたことがすごく鹿屋市を思い出すきっかけになりました。

■「関わりしろ」を生み出す

川瀬:先ほど、よそ者との関係をどうやって持続させていくかということを考えていらっしゃるというふうにお話を伺ったんですが、私自身、卒論でよそ者とか関係人口について研究をしていて、その中で思ったのは、「関わりしろ」という言葉があるんですけども、関わりしろをいかにつくっていくかということが大事だというふうに感じました。

この関わりしろというのは、「その地域とよそ者が関わる余白」というふうにいわれているんですが、例えば地域側が課題であったりだとか弱みをよそ者に見せて、よそ者がいかにそこにアプローチできるか、どういうふうに関わり合いに接していけるかといったところを、もっと前面にアピールしていけばいいのかなというふうに思いました。

今回のPBLは結構、学習であったりだとか、その地域の魅力を知るといったところにフォーカスを置いていて、そういった点ですごく良かったんですが、もっと地域の問題と一緒に共同で取り組んでいけるような、そういった活動にシフトしていけたら、私たち自身も学習にもなるし、すごくいい経験になるので、そういった視点で取り組んでいけたらいいなというふうに考えました。

■感情を共有する場を継続してひろく

陳：2点の質問に対する自分の考えたことを述べていきたいと思います。まず、市と地域との間でどういうふうに関係を続けていくかという話です。確かに鳥越さんがおっしゃっていたように、そして私も連想できるように、地域と市の間にはやっぱり距離感があって、そして市役所の役人さんも立場とかそういうものの違いによって、皆さんとなかなか思いを、考えを共有することが難しいという状況になっていると思います。そういうことに対して私はやっぱり感覚というか感情の共有が大事なんじゃないかなというふうに思っています。

というのは、当たり前なことなただけでも、懇親会とか、そういうのを開く、そういう会合を開く回数を増やすというわけではなくて、定期的を開くことによって、市役所の方も地域の方と一緒に、何を思っているのか、そして楽しいこととか、一緒にすることによって感情を共有することで、何をしていけばいいのかもおのずと頭の中に現れてくるのではないかなというふうに思っています。

次に、学生というか、私たち関係している者がどういうふうに関屋市を連想していくのかという話についてですけれども、私は11月のフィールドワークから今まで、帰ってきてから何度も鹿屋市の皆さんを思い出すような経験がありました。それがどういうきっかけだったのかというと、1つ目は、故郷のふるさと納税という支援を見ている時に、「あ、じゃあ鹿屋市の場合はどうなんだろうか」ということ。2つ目は、避難活動に参加させていただいたので、災害時に、特にミサイル警報とか、津波警報とか、火山灰だとか、そういうニュースとか警報が出ていると、おのずと皆さんのことを考えてしまう。そして、それがなぜかという、自分の修士のときの研究もそうだけれども、ずっと1つの団体が同じ被災地に通っていく。長い間、同じ被災地に通っていて、支援活動を続けてきた中で、その隊員たちがみんな思っている最も大事な理由としては、その被災地で生活している被災者たちと顔の見えるというか、顔を覚えるような関係を築いたからということですね。

私の場合だと、さっきの話に戻りますけれども、災害とか、ミサイル警報とかが発出された時に、上菌さんとか、菌田さん、荒平さん、みんなの顔が一つ一つ浮かんできて、天神町は、そして鹿屋市はどうなっているのかというふうに思い出して、その時の経験とかもおのずと、その時に一緒に想起して、また鹿屋市のことをさらに、愛するというよりも、分かってほしいとか、もっともっと知りたいというふうに、そういう感情に満ちるような経験でした。

やっぱりこれから展開していく地域づくりと活動の中で、来られた方々が地域の皆さんとも接触して、一人一人、人間個々の関係を築かせていくことが大事なんじゃないかなというふうに思いました。そのためにはやっぱりユクサだとか、これから、今、計画の中にある、空き家をカフェにするとか、そういうカフェ、人がたまる場所が大事になってくるのではないかなというふうに思います。

■顔の見える関係というつながりの深さ

趙：私も陳さんと同じように、鹿屋から帰ってきたら何回も何回も鹿屋のことを思い出して、「あ、楽しかった」みたいな、そういう経験をしていました。それはなぜかという、理由はたぶんこういうコミュニケーションの深さにあると思います。私たちは一般の観光客と違って、そこに行って、その地域に深く踏み入れて、皆さまとの間に何か、そういう観光客と観光地の間に存在する、そういうつながりより深い、しかも強いつながりができたと思います。だから、これから日本中のこういう地域再生とか地域おこしとか、こういうところも人が来る人数というより、来た人と地域の深さに力を入れてほしいと思いました。

もう1つは、今までの地域おこしとかも、まず人を呼



び寄せてきて、来たらいいというところで終わっているところが多いと思いますが、これからはもう学生、特に大学生、高校生。高校生はちょっと難しいかもしれませんが、こういうある程度余裕がある大学生。授業だったら一番いいんですけども、授業じゃなくても、例えばオーストラリアとか、いろんな国でそういうワーキングホリデーみたいなビザがあるじゃないですか。そういう夏休みの期間中を利用して、地域のそういう中小企業がアルバイトをしてくれる子が欲しいという情報があって、市役所の職員さんたちがそういうのを何かチャンスとして、大学とコンタクトを取って学生を募集して、学生に住む所と往復のチケットを提供したら、ちょっと安くても、結構たぶん大学生だったら楽しんで行くと思います。

そういうふうな取り組みを通じて、若い世代からそういう深いつながりを築こうとするほうが一番いいんじゃないかなと思いました。

■防災に積極的な地域の取り組みを、そうでない地域に広げていく

白口:安全安心課の白口です。今日、皆さんから意見をお聞かせいただいて、本当に皆さんから活動を継続していくこと、継続だとか、あと、将来の防災活動の懸念についてなど、いろいろ考えてくださっていて私には響きました。

私は防災の業務に携わっているんですけども、今、私たちの仕事は天神町内会のような防災意識が高く、積極的に活動されているような取り組みを、そうでない町内会に広めていくという活動に主軸を置いて業務を行っています。やはり災害はいつ来るか分かりませんので、こういった取り組みを継続していくことが大事だと、こういったところにも向けていかなければならないとあらためて感じました。今日は本当にいい意見をありがとうございました。

■「鹿屋、よかったよ」と戻って伝えることが地域活性化につながっていく

大原:安全安心課の大原です。お久しぶりです。今回、天神町内会に来られたわけですが、防災訓練とか、毎年、活発にされている町内会だったので、さっき白口が言ったように、活動をしていない地域に比べて、防災訓練とかがすごく取り組まれています。他でもやっているように見えたと思うんですけども、実際にこういう訓練ができていないところが多くて、できていないところの課題等も頂ければ、僕らも今後に生かせるのかなとは思っています。

今日出たお話については、1つ思ったのが、趙さんがまた将来的に家族と鹿屋に旅行に行きたいとか、また来年も来たいと梅さんとかも言ってくれたんだけれども、実際に来て、体験してくれて、味わってくれた人はそう思ってくれた。じゃあ大学に帰って、こちらに来ていない人たち、戻って自分の周りの人たちに「鹿屋はこういう所だったよ」とか、「鹿屋でこういうことをしたんだよ。楽しかったよ。行ったほうがいいよ」と、果たして言えたのかどうか、言う気持ちになれたかというのがすごい大事なことだと思うんです。

なので、来てくれた人は感じてくれて、それが「良かったよ」と、「旅行して良かったよ。行ってみれば」とつながらないと、うちの地域活性化にはならない。その部分を実際に言えたのか。言えなかったとしたら、どこが足りなかったのかということも、今日じゃなくてもいいんですけど、そういうお話も頂ければ今後につながっていくかなと思います。

■多様な担い手と一緒に、地域の最終的なゴールをどんどん変えていく

橋口:地域活力推進課の橋口です。こんばんは。大変貴重なお話をありがとうございました。フィールドワークにいらっしやった時に、確か中野さんだったと思うんですけども、なかなか若い方が菅原地域に移住しにくい地域だということで、「最終的には死にゆく地域じゃないか」というふうに、鋭い、若い方のご意見を頂いて、私もちょっと言い返すことができなかったのを思い出したところでした。

ただ、いろんな方が担い手として継続して関わっていくことで、最終的なゴールをどんどん、どんどん変えていくことができるんじゃないかなと思って、今、地域づくりに取り組んでいるところです。天神会場にいますが、新たに菅原地域づくりに携わってくれる地域おこし協力隊も、今回、1月から着任しましたので、今後も大学生の皆さんと色々な形で連携していければと思ったところです。ありがとうございました。

■大阪においても避難訓練を通じた防災チームづくりを

温水:安全安心課の温水です。素晴らしいプレゼンテーションをありがとうございました。鹿屋の、実際私が気付かない長所とか短所、これを気付かせてくれてありがとうございました。

冒頭に稲場先生がおっしゃったように、防災の取り組み、これがスタートラインだったと思うんですけども、やれ

カンパチとか、やれ町内会長さんの人柄とか、やれユクサで見た夕日、全部持って行かれて、防災専門官としては非常にコメントしづらい。隅っこのほうに座ってありました。

ただ、みんなの発表を聞いて思ったことというのは、いわゆる今回の研究調査というのは、おそらくみんなの研究のベースライン、そして気付いたのは人と人の近さとか、あるいは人と自然の近さ、いわゆる大阪で感じられない、こういう心地良さ、これがベースラインになったんじゃないかなというふうに思いました。これからみんなの長い人生のうち、今回のこの経験、これが生かされればと思います。

ただ、最後に一言、ちょっと反撃させてください。中野君とか梅さんがカミングアウトしてくれたんだけど、避難訓練に参加したことがないということ。大阪は台風とか地震、結構災害が多い所です。避難訓練の見学で分かったと思うんですけど、実際に災害が起きて動くときには、避難訓練の通りには絶対できません。なので、若いみんなが積極的に訓練に参加して経験をやる。そして、その情報を発信する。それがすなわち、これから先、若い世代、あるいはわれわれを含めたお年寄り世代を含めて、防災に強いチームになると思うので、そこはよろしくお願ひしたいと思ひます。

最後になりますけれども、今回は短い時間かもしれませんが、このテーマを大事にして、これからも交流していきましょう。また、今後のみんなの健康、そしてご活躍、これを祈念して、私の防災専門官としてのコメントを終了いたします。

大学からの挨拶 川端亮（大阪大学大学院教授）

川端：皆さん、お久しぶりです。大阪大学の川端です。昨年、私は3回、鹿屋に寄せていただきまして、やっぱりいろいろ興味深い点がありました。思い返すことも皆さんと同じように非常に多くありました。

ふるさと納税で私も鹿屋のウナギを頼ませていただきまして、お正月においしくいただきました。やっぱり食がいろいろあるということも鹿屋の魅力だと思います。自然のこととか、その他にも学生さんが述べたようにいろんな点でいい点があると思ひますし、人もおられます。確かにお金など足りない部分もあると思ひますけれども、いろんな点で、今後もやっていきたいと思ひます。



特に継続したりとか、大学として関わる事が続けられることができれば、いいなあと思ひています。先ほど言われました、自分の友達に言うことができたのかという話がありましたけれども、来年度も継続できれば、

今年参加した学生さんたちに、下の世代の学生さんたちに紹介してもらおうというような形で、どんどんと関わる人を増やしていくようなこともできると思ひます。

また、大学という組織は、やはり地方自治体としての市とも違ひますし、地域とも違ひるので、そういう大学が鹿屋市という地域の中に入ることによって、中に入るといっても、いろんな話を、深く話をするというだけのことですけれども、そういうことをきっかけに市と地域との橋渡しみたいなこともまたできると思ひます。また、逆に大学のネットワークを使って、いろんな違ひ集団の人たちと鹿屋市のかかわりを増やすこともできるかなと思ひます。今日、空き家に花を植えたという提案ができました。「あ、そうだな」と思ひましたけれども、よく考えましたら、ほかの地域でも結構あることだと思ひますし、NPOで花を植えるような活動をしているところもありますから、そういうようなところにお願ひしてもいいですし、あるいは地域で花を植えるという活動をやられたらいいんじゃないかなと思ひますから、そういうようなところでも大学は、お手伝いできることは多いと思ひます。

ですので、大学というところはやっぱりさまざまな人がいるし、特別な組織ですので、大学が関わるということは、他の団体が関わるということとはまただいぶ違ひ意味があると思ひるので、そういう意味合いをうまく継続して、防災に関しても地域づくりに関しても、やっていきたいと思ひております。

今年度、まだ3回というか、初めての試みでしたけれども、非常に得るものは私たちにも、学生にも多かったと思ひますので、ぜひ来年度以降も継続できるように頑張りたいと思ひております。来年度以降もどうぞよろしくお願ひいたします。

鹿屋からの挨拶 天神町内会 上菌会長

上菌：今日はどうもありがとうございました。今後もいろいろなことを続けていきます。決して私1人の判断でやるんじゃなくて、役員さん方の意見を聞いて、消防団のほうにも相談をかけて訓練等を行いますので、今後とも防災のほうでいろいろと皆さんの知恵を借りたいと思います。ぜひよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。



参加した教職員の感想

2021年7月、10月、11月と3回、鹿屋市を訪問させていただきました。

7月は鹿屋市の市役所で職員の方々と顔合わせをさせていただき、今後のPBLの打ち合わせを行いました。まだ地理もわからず、昼食を食べに出たら、開いているお店をなかなか見つけることができず、さまよいました。

10月は学生さんと一緒に県の防災研修センターを見学、鹿屋市の災害対策本部訓練の見学も行いました。鹿児島県は災害が多い地域であることをセンターで学習し、市役所安全安心課の災害対策本部訓練では、想定された事態に対応する訓練を見ることができました。鹿屋市の職員さんの顔も見覚えのある顔になってきた2回目でした。

11月は天神町内の避難訓練に参加し、町内会の会長さんに連れられてまちあるきをし、町内の方々とお話しすることができました。観光名所となる神社があり、宿泊施設もありますが、若者が少なく、空き家もちらほらと見られる町でした。

そのほかにも自衛隊の基地、バラ園を訪問し、小鹿酒造、久保醸造を見学したり、カンパチのえさやり体験もすることができました。さまざまな産業、観光の魅力を実際に体験することができました。

人口減少、過疎化が進む地域での問題は大変深刻で解決が難しい課題です。このような場で実習をさせてもらえる学生は学習の面では大変恵まれています。いろいろな課題を目の前にして、情報収集能力を発揮し、思考力を鍛え、課題解決のための応用力を高めていくことができます。さらには発表会を通じて表現力も高められます。学生のPBLにとっては大変有意義です。一方で鹿屋市の方々にとってはどうなのでしょう。課題は数回の訪問で解決できるような問題ではありません。その中で大学が継続的に関わることによって、大学生という若者が、人は替わっても、長年にわたって関わり続けることで何かを引き起こせるかもしれません。

この1年で鹿屋市とのかかわりの基盤ができたのではないかと思います。これからも学生とともに、教員も、職員も、鹿屋市の人々と関わり続けていきたいと思っています。

川端亮 (大阪大学大学院人間科学研究科教授)

私自身は、2019年10月、12月、2020年2月、コロナ禍に入った後は、2020年11月、そして2021年7月と訪問させていただきました。私どもが行っております自治体様のあつまり、SSI地域・まちづくりフォーラムという場の2020年2月のトライアル会合、2021年2月の第1回、2022年2月の第2回には、鹿屋市役所のみなさまに、ご参加いただきました。今回の学生が伺わせていただいたフィールドワークでも本当にお世話になりました。

このようなご縁をいただくことで、多くの方々にお会いし、お話をし、多くの場所を訪れることができました。鹿屋市のみなさまの幸せのためにはまだ何もできておりませんが、いままでみなさまにいただきましたご縁や学びを大切に、大学のミッションである教育と研究を通した社会貢献を、鹿屋市さまにて少しでも行えるように努力してまいります。これからも末永くどうぞよろしくお願いいたします。

伊藤武志 (大阪大学社会ソリューションイニシアティブ教授)

初めての鹿屋市訪問は、2019年10月でした。当時政策推進課課長補佐の鳥越賢二氏、主事徳永光亮氏にお会いし、市の抱える課題等を伊藤先生と共に伺いました。その後コロナ禍もあったにもかかわらず、鹿屋市と大阪大学との接点が、点から線、そして面と拡がりPBL実現の運びとなりました。今回のPBLは、私にとっても貴重な経験になりました。

印象的だったのは、地元の方が学生と話すときの笑顔や、他を喜ばせたいというきめ細やかな対応。と同時に、現場でしか分からないこともあることを再認識しました。

「風の人」、「土の人」、「水の人」が地域づくりには必要だという話を伺ったことがあります。地域の市民を指す「土の人」、その地域に寄り添う形で活動する行政やNPOを指す「水の人」、そして芽を出し強く育つ「種」のようなアイデアをその土地に運ぶ「風の人」です。

今後、PBL活動をされた学生が「種」を運び、鹿屋市の「土の人」や「水の人」を通し育てていくことを願っております。そして、私自身もその一人になりたいと思います。

(*現時点では、鳥越氏、徳永氏ともに異動されております。)

井上大嗣 (大阪大学社会ソリューションイニシアティブ特任研究員)

鹿屋市へは、大阪大学SSIが取り組む「社会ソリューションコミュニケーターの育成」のPBL活動の進捗の確認を目的とし、1、3回目に同行しました。

1回目の7月は鹿屋市の防災マップをもとに、いくつかの避難所を回って確認し、観光地を巡り、土地を知ることが出来ました。3回目の同行で感じたのは、学生の成長でした。よそ者である自分たちを受け入れてくださった鹿屋市の方々に思いを馳せていたり、時に自分の故郷と重ねたりしている姿を見て、座学では学びきれないフィールドワークであったこと、また、自分ごととして捉える力も養われたことを確信しました。この経験を活かし、次のステップに進んで欲しいと願います。

鹿屋市のご協力で実施できたPBL活動、今後も地域課題の解決と一緒に考え、継続されることに意味があると思っています。

最後に、カンパチのえさやりは、とても魅力的な体験でした。

畑中英理子 (大阪大学社会ソリューションイニシアティブ特任事務職員)

鹿屋フィールドワーク2021

[報告書]

2022年3月発行

編集・発行：大阪大学社会ソリューションイニシアティブ (SSI)

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2-8

大阪大学吹田キャンパス テクノアライアンス棟 9階 B907

TEL：06-6105-6183

E-mail：ssi@ml.office.osaka-u.ac.jp

Website：https://www.ssi.osaka-u.ac.jp/

協力：鹿児島県鹿屋市役所

大阪大学大学院人間科学研究科

SSI 基幹プロジェクト「地域資源とITによる減災・見守りシステムの構築」

(代表：稲場圭信大阪大学大学院教授)

制作／印刷：有限会社ブックポケット